

駿河湾の深海魚 (6)
 スイトウハダカ (その2)
 久保田 正・佐藤 武



図1 スイトウハダカと近縁なシロハナハダカ
 日本近海産 体長 62.0mm

スイトウハダカ *Diaphus gigas* と近縁な種として、シロハナハダカ *Diaphus perspicillatus* が知られています (図1)。スイトウハダカは、太平洋の温帯域に分布し、特に出現頻度が高いのは、本州太平洋側の駿河湾や相模湾の陸棚縁辺の近海です。一方、シロハナハダカは世界の三大洋の温・熱帯域に広く分布し、日本近海では黒潮流路の中心よりも外洋域に出現し、両種の分布域は違っています。

この両種は、体の側面にある二つの発光器 (SAO₃ と Pol) の位置および眼径の体長に対する割合などの違いにより区別されています。このように2種の外部形態上は明らかに相違が認められ、別種として扱われています。しかし、一方では同一種であるという見解も出されてきました。アメリカの一部の研究者は、本種がシロハナハダカの分布域の北側に接して分布していて、その生息環境が悪いことにより成熟を停止したまま巨大化 (gigantism) したのではないかと言うのです。またスイトウハダカの小型個体さらにシロハナハダカ的大型個体がなかなか得られないことからそのような考えに至ったようです。今までに得られた研究の結果からも2種の体長組成は、上述のような傾向を示しています (図2)。

そこで、この2種が同一種か否かを確認するために駿河湾と本州南方海域から得た個体についてそれぞれ11の体節の形質の平均値の差の検定により比較を行なったところ、背鰭と臀鰭の軟条数、鰓耙数 (上枝数、下枝数、上・下枝数の合計) さらに幽門垂数などに明らかな有意差が認められました。このような状況の中で2005

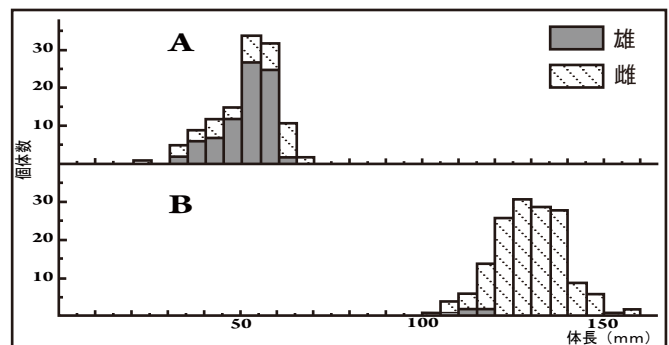


図2 2種の体長組成の比較

A: シロハナハダカ 日本近海産

B: スイトウハダカ 駿河湾産

(平成17)年に水産総合研究センター遠洋水産研究所のスタッフが、ミトコンドリアDNA (mtDNA) の分析により、混沌としていた2種の存在を分子生物学的な手法によって明らかにしました。このように本科魚類の中には、網目のサイズや口径の違う稚魚ネットさらに中層トロール網を用いているいろいろな海域で採集を試みても何故か採集されない大きさの個体が存在し、それらが海洋のどこで、どのような生活をしているのかが全く解らない種類も多いのです。ここで扱った両種についても採集されない大きさの個体は一体どこにいるのか、またどのような生活をしているのが判らないのです。また、駿河湾のサクラエビと混獲される大型種のスイトウハダカやハダカイワシ、さらに中型種のセンハダカなどは、魚市場では取引されませんが、サクラエビ漁業者の家庭では昔からこれらを食用として料理されています (本誌第34号、P.7参照)。湾内には大・中型種の生物量も多いことから、今後これらの食用化に向けた本格的な利用開発の研究が行われることを期待しています。